

「2019年度フィリピン派遣参加報告書」

京都大学 人間・環境学研究科 修士2年 本間桃里

2度目となる参加だったが、新たに学ぶことばかりで非常に意義深い1週間だった。全ては書ききれないため、特に考えさせられたことを2点書き留めておく。

第1に、制度の狭間にいる人々の生活と様々な権利をどのように保障していくかについてだ。例えば日本で働く留学生が挙げられる。フィリピン海外雇用庁(POEA)は、海外で働くフィリピン人労働者を守るため悪質な日本語学校等の摘発に前向きな姿勢を見せていたが、実際に摘発できているのは氷山の一角にすぎないと懸念していた。来日にかかった費用と学費の支払いに追われ、法律で定められた週28時間を超過して働かざるをえない留学生が多くいるが、留学生のアルバイトは厚労省の管轄にはならず、この問題を扱う所管が欠如している。また、元エンターテイナーのフィリピン人女性と日本人男性の間に生まれたジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン(JFC)も制度の狭間にいる。興行ビザが10代や20代の若い女性を対象にし、短期滞在という制約を課したことからもJFCの存在は「制度が作り出してきた」と言えるにも関わらず、正確な数の把握や、母親とJFCに対する積極的な権利擁護は政府主導で行われてこなかった。NGO団体DAWNには、父親に会えた子、会えたが複雑な気持ちの子、会えない子など、様々な状況に置かれた子どもたちがいた。以前京都に来てくれた子どもたちとの再会も果たし、こうして継続的に関わることで子どもたちの心境の変化を感じられた。DAWNの代表者からはJFCの問題が社会で風化していると危機感が語られたが、私は日本でJFCは常に見えづらい存在で、子どもたちの背景や普段感じていることを気に留める人は少ないと感じる。必要な支援に辿り着かない大勢のJFCがいることを踏まえて、今後も子どもたちと関わり続け、個々のストーリーを社会のものとして捉えられるような環境を作っていきたい。

第2に、日本で働き続ける困難さについてだ。日本で就労経験のある異なる人々から、母語が日本語でないことに女性であることが加わり職場で不利になった経験や、職場の人間関係の築き方が独特だとの意見をうかがった。一方トレーニングセンターでは日本での就労を目指して一生懸命日本語を勉強する技能実習生たちの様子を拝見した。日本に来て良かったと思ってもらえるのかを想像すると何とも言えない気持ちになった。労働者としてのみでなく、人間としてどのように受け入れ社会統合していくか、まだまだ課題が残る。

研修を通じて多様な立場の人々と繋がることのできた。研究者を目指す者、そして一個人として、今後フィリピンコミュニティとどのように関わっていくかヒントを得ることができた。第二次世界大戦中マニラで日本軍が多く市民を犠牲にしたお話をガイドさんから聞いたあと、気がついたら知らないフィリピンのおばあさんが私に微笑み肩を組んで歩いてくれていたことは忘れないだろう。私がタガログ語の単語を口にしたとき、新しくできた年の近い友達が「フィリピンの言葉を勉強してくれてありがとう」と嬉しそうに言ってくれたことも印象に残っている。フィリピンにいる間、山積みの問題や不条理に辛い気持ちにもなったが、それ以上に温かい気持ちを受け取った。これをバネに、より一層研究や活動に力を注ぎたい。

謝辞

安里先生、国際交流推進室の職員のみなさまをはじめ、多くの方々のご尽力のおかげで無事に研修を終えることができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。